

◆西野周次 選 「季語との融合」

初夢にまさかの種田山頭火

遠藤若狭男

山頭火は、終生を流浪に明け暮れたという点で、社会人としては褒めるに値しないかもしれない。しかし、その憎めない人柄のために知己から支援、厚遇を得ている。辛酸で稀有な境涯にも関わらず人並外れた才能を発揮したことは、とても興味深い。その山頭火が事もあろうに初夢に出てきた。おそらく作者の私生活にも苦行、難業があったと推測される。

「風格は石にもありて蛇笏の忌」「読み耽る江戸川乱歩蚊帳の中」「妻になほ恋して与謝野晶子の忌」の他、鷗外忌、漱石忌など、著名人の名前や忌日を駆使した名句があり、文学への造詣の深さが伺える。山頭火への思いが初夢に繋がったのだろう。

太陽のやうな嫁来てお正月

三輪和子

都会ならまだしも第二次、第三次産業が拠り所の島嶼や山間部にあつては、嫁取りも儘ならない。いわゆる草食系男子が増えた事も一因か。嫁を娶るのも大変な時代である。そんな状況で、太陽のように明るく気立ての良い花嫁がやって来た。まさに盆と正月と一緒にやって来たような嬉しさである。

街を踏むゴジラの心地霜柱

峰崎成規

おっととと、こう来たか！のよもやの展開。霜柱や薄氷を踏む快感は、万人共通のものであろう。ミシミシ、バリバリ、踏みしだく度に発生する何とも言えぬ音。誰に咎め立てされる訳でも無い一種の破壊行為。他愛ない遊びをゴジラに仕立てた大胆且つ奇想天外な発想のオリジナリティが、この句の生命線である。街と怪獣ゴジラの取り合わせが巧妙で、怪獣映画のワンシーンを想起させて楽しい。

懐手してをり意地を張ってをり

大崎康代

しかめっ面をしてそっぽ向くばかりの素直になれない自分に業を煮やし、いささか持て余してもいる。好好爺ならぬ好好婆にもお人好しにも程遠い。自分

の思いや意見が通らない事への鬱憤なのか、構って貰えない事へのささやかな抵抗なのか。妥協するタイミングを押し量っているようにも読める。「をり」のリフレインが意固地さを一層引き立てて、あるある感を増幅している。

レインボー大アラスカをひとまたぎ 八木 健

アラスカは北アメリカの北西部にある州。アリューシャン列島を傘下にベーリング海峡を隔て、ロシアのチュコト半島と対峙する広さを誇る大地である。そこにかかる虹である。標高六千メートルを超えるマッキンリー山にあまねく輝く七色の光彩。屹立の最高峰より大氷河に至る大パノラマをも神神しく凌駕する。アラスカという地名の効果が抜群である。その場に居合わせるかの臨場感があり、句のスケールの大きさがいい。

秋暑し魔女の一撃食らひけり 中野サヨ子

句会は俳句のみならず、知らない言葉を教わる学びの場でもある。「可惜夜(あたらよ)」は、明けてしまうのが惜しい美しい夜のこと。「天使の梯子」は、雲の切れ間から太陽の光が放射線状に地上に向かって差す現象のこと。「魔女の一撃」とは、急性腰痛症、つまり俗称、ぎっくり腰のことである。厳しい残暑の最中、腰に走った激痛に耐え忍ぶ姿が下五で活写されている。子細に語らぬ表現からその深刻さが伝わってくる。

寂しくはないの小鳥が来てるから 中野サヨ子

おそらく作者は一人暮らしなのだろう。自分のことを池田澄子の日常の言葉でさらりと詠んでいる。平穏で慎ましい生活ぶりが伝わって好感がもてる。

身に入むやわが衰へのただならず 角川春樹

心身の衰退は、一朝一夕に来る訳で無く、スローカーブを描くようにやって来る。そうした萎えを自覚しつつ反発したくもある作者なのである。「ただならず」の結句には、まだまだ人生捨てたものじゃないと自らを鼓舞する気持ちも感じられる。

古里を送ったけんね島みかん 関谷昌子

新天地を求めて都会へ行ったはらからや子ども達。「古里を送る」の措辞と、中七の口語表現に親心が溢れている。おそらく箱一杯にあらん限りの品々を詰め込んだに違いない。

目出度さもちう位もおらが春

小林一茶

一茶、五十七歳の時に編纂された句集『おらが春』の中の一句。一茶は、幼少期に母を亡くし、奉公に出されて以来、生活は常に厳しく、弟との相続争いや、闘病、子の夭逝、妻との死別、大火による自宅の喪失など、艱難辛苦の連続であった。どん底の暮らしの中であって、中位と詠みきるところに一茶の潔さと逞しさがある。開き直り、諦観、達観、これれらが緋い交ぜの境地ともいえる。一茶の句は、総じて素朴、純粹で、その目線はいつも弱者に向いている。